



オオトリ。巻末インタビュー

たまみや たかし 玉宮 孝さん

おしえて灯台守さま！

鯧ヶ崎灯台は、岩手県宮古市から車で1時間さらに徒歩で1時間の場所にある、本州最東端の灯台だ。1902年3月から今日まで、百十年以上も海を守っている。この灯台は、映画「喜びも悲しみも幾歳月」（灯台守の生き様を描いた素晴らしい映画）と深い関わりのある灯台でもある。現在、日本の灯台はすべて無人化されたが、かつて灯台には灯台守が住み込み灯りを守っていた。1960年代、この灯台に勤務していた玉宮孝さんに、灯台守の仕事、生活について当時のお話を聞いた。



鯧ヶ崎灯台と玉宮孝さん 写真 高野健三

もう今は取り壊されてしまっているけど、灯台の敷地に官舎がいくつかあってね、そこに7家族で寝起きをしていたよ。そのころ私は独身だったけど、子どもや奥さんも一緒に住む人もいた。仕事はシフト制、4時間を1コマとして一日に2コマの8時間労働。例えば0時から4時と、正午から16時というようにね。

昼間も仕事があったんですか？  
無線は昼夜問わず呼んで来るからね。モールズ信号だよ。（SOS）トトト・ツーツー・トトトと来たときは緊張したね。Save Out Sign の意味だ。信号を出している船の位置を特定し、その場所から安全な航路に導かなくてはならないんだ。

灯台守の仕事というと、夜、灯火を燃やし続けることだと思っていました。

灯台守の仕事といっても時代と共に内容は変わっていったんだよ。私が灯台に勤務していた時は、すでに電化されていたんだ。ただ一度だけ大雪で10日間も停電したことがあった。さらに困った事に非常用の自家発電装置も調子が悪かった。その時はじめて昔ながらの方法で、マントルに火を灯したよ。レンズは電力がなくても分銅を巻き上げ、落下するときの重力をつかって回すことができるんだけど、この時は調子が悪くて手で回した。手が疲れると、寝ころがって足を使ってでも回し続けた。そうしてなんと一晩、灯りを回し続けられたけど、次の日漁師に灯台の光が逆回りしてたぞって言われたなあ！笑

特に辛かったことはありますか？  
三陸沖は（「やませ」が吹く時）ひどい霧が発生することがある。そうすると灯台の光が届かないから、「音」を使って灯台の位置を知らせなければならぬ。霧笛というんだけど、間近で聞くものすごい轟音だ。ガラスがびりびりと震えるほどね。それを霧が続く

限り鳴らさなくてはならない。1週間も続く事もあった。耳がおかしくなって無線も聞こえづらくなる。子どもは泣き、大人でさえも表情は乏しくなっていく。やっと霧が晴れて音を消してもジーンとした感じが耳に残ってしばらく治らなかつたな。

灯台守の仕事は辛い事ばかり？

いや、灯台から眺める朝日は素晴らしいものだよ。本州最東端の灯台から見る日の出なんだ。空の色が刻々と変化する様子は何回みても見飽きる事はなかったね。大変な仕事であることは間違いないけれど、美しい海の景色や、地元の人たちの暖かさに励まされて、海上の人々の命を守る仕事として、みんな誇りをもってやっていたんだ。

灯台好きの方々にとっては、知る人ぞ知る存在の玉宮さん。私も敬愛する気持ちをこめて「玉ちゃん」と呼ばせていただいております。灯台のように紳士で、優しく強くてカッコいい玉ちゃん。これからも沢山灯台の事教えてください！

